



短篇小説

廣津柳浪選

特別第三賞

霜夜

岩代須賀川本町

服部すいせん子

(一)

「馬鹿ッそんなことで離られると思ふかッ、妾が何だ、酒を呑むが何だ！お霜貴様はな己公の娘で無いか己公はな瘦せても枯れても元は武士だぞッ武士の娘が夫が身持が悪るいからとて、それで出る……」  
元之進は殊の外立腹である。眞白なチョン鬘は傾むいて、魚網の破れをつくろつて居た手を、ブル／＼顫はしながら握り占めて居る。  
障子の破れ目を、吹き入つた風に、手ランプの煙り亂れて、上り端に固くなつて居るお霜が髪の亂れ、青白い顔にハラリとかゝる。

女子文壇 第壹卷第拾貳號

短篇

小説

—(八一)—

「源藏はな己公の目鏡ぢやぞ、年取つても此元之進が見立ちやぞッ妾を持つて酒を呑むも源藏の勝手ぢや、貴様が知つたことぢや無いわ！それ丈の働さがあるんぢや」  
圍爐の鐵瓶はうなり出した。四疊半の破れ疊、たゞ元之進が怒氣の聲のみ。  
「お霜ッよいから歸れ、己公は貴様が嫁く時に、貧乏になつたら歸れとは言はなかつた筈ぢや、亭主の身持の悪い時には出て來と言はなかつた筈ぢや、」  
元之進が大聲に驚いてか、背なる源一は泣き出した。  
お霜はたゞ涙。  
「其妾の女と一緒に住めな、お霜！たゞ負けるなよ、貧乏と戦つて……」  
「さア歸れ、夢の間に歸れ！」  
悄悄と立上れるお霜、廿五の女盛りを、あはれ誰が爲の苦勞ぞ。やつれたる其後姿、長く細く破れ和壁に影を寫した其様、さすが老の身のつと面を外らしたのである。

(二)

背の源一はまたすやくと寝入つた。再び戻らじと渡つた土橋の上に立つて、お霜は我知らず振り向く彼方、



一もとの大松月に冴えて、稍々傾むける小家の燈。

巢に夜露を置いて月光にキラ／＼と。家の中はたゞいびきの聲のみ聞える。

やがて寝返りの音して

「水ーお霜つ」

「ハイ」  
お霜は決然答へて家には入つたのである。

定めし明朝は霜である。月、月の光りはいよく冴えて。

洗練の痕は十分に見えて居る、所謂書き流しの作とは同日の談てはない、元之進の昔氣質、お霜の溫柔、數語の間に其人活きて躍る、而かも叙景の筆に最も妙を得て能く急所を衝く、敬服(選者評)

たゞあゝあれでは  
……近頃はさ  
つぱり書筆も取ら  
ない様子、たゞ寝  
てたゞ呑んで……  
……それでも働さ  
があると言ふもの  
かあれでも、いえ  
寧ろ妾と一緒に住  
んで見やうか？そ  
れでは益々……  
いつしかと立どまれる我家の前、こぼろぎの啼く音は  
ひたと止んで落ちかゝつた壁に、かゝつて居る蜘蛛の



田